

岡真理さんから

岡真理（おか まり）：東京外大アラビア語学科卒、カイロ大留学、京大大学院教授。アラブ文学や第三世界のフェミニズム研究で著名。パレスチナ問題に造詣が深く、現地訪問・講演等多数。



《ぼくはなりたくない》

きみに謝りたい ガザで子どもは、/育てたくない
なりたくないんだ、/父親になんか きみを喰わせてや
れない、/父親になど食卓に食べ物を置く、ただそれだ
けのために、/夜更けまで、/仕事を探し回って、
/きみとともに過ごすこともできない、/父親になど

きみが危険にさらされても、/護ってやることもでき
ない、/父親になど/父親自身が自分を護れないのだから
...

きみが走ったり遊んだりできる、/広々とした家で、
/きみを育てることのできない、/父親になど
きみに教育を受けさせるお金もない、/父親になど
きみになってほしくないんだ、

通りで、襦袢をまとして、/ティッシュを売る、/そん
な子どもに
旅行することもできない、/仕事も見つからない、/そん
な子どもに

デモで自分の権利を訴えたけで、/撃たれて、脚を切
断される、/そんな子どもに
絶望から自分の命を絶つ、/そんな子どもに

ぼくのところにやってきて、/こんなことを訊ねる子
供に 「こんな不公平な世界に、/どうしてぼくを連
れてきたの？」

~~~~~

これは、ガザに住む、バスマン・デラーウィさんが英  
語で書いた詩です。

ガザの完全封鎖は今年で足掛け13年、続いています。  
自殺が最大の禁忌とされるイスラーム社会のガザ地区  
で、ここ数年、自ら命を絶つ者たちが激増しています。

子どもたちの胃袋を満たしてやれないために命を絶つ  
た父親がいます。

こんなガザで生きていくことを子どもに強いたくなく  
て、胎児もろとも命を絶った妊婦がいます。

銃を構えるイスラエル兵にみずから向かって行き、射  
殺されることで、「受難者」となることを選択する若者、  
衆人環視のなか、軽油をかぶって、自らのからだに火を  
つける若者もいます。

こんなガザで生きていくよりも、自殺して、地獄で永  
遠の業火に焼かれたほうがマシだということです。

現在のガザを一言で言い表すなら、文字どおりの  
「生き地獄」であり、「絶望」です。

それでも、毎回毎回、犠牲者を出しながら、金曜  
日のたびに、ガザの人々が、帰還の行進に参加する  
のは、そして、英語で、世界に向けて、ガザの「絶  
望」を発信するのは、この渾身の叫びに、世界は必  
ずや応答すると信じているから、人間を信じている  
からです。

この世界が生きるに値する世界であることを信じ  
ているからです。

「真の地獄とは、人が苦しんでいるところのこと  
ではない。人が苦しんでいるのを、誰も見ようと  
聞こうともしないところのことだ」

中世のイスラーム神秘主義の思想家、アル＝ハッ  
ラージュのことばです。

この世界が真の地獄ではなく、生きるに値する世  
界であることを、私たちが人間であることを証明し  
ましょう。

